

# 資料編

## 目次

資料 1	伊豆の国市の歴史概要 — 重層する関連文化財群の時代と区域 —	1
資料 2	伊豆の国市の歴史変遷（年表）	20
資料 3	市内指定文化財の状況	25
資料 4	伊豆の国市域の標高区分	31
資料 5	伊豆の国市域の土地条件	32
資料 6	伊豆の国市域の地質区分	33
資料 7	伊豆の国市域の植生区分	34
資料 8	歴史文化基本構想に関するアンケート調査結果	35
資料 9	伊豆の国市まちづくりに関するアンケート調査結果	41
資料 10	伊豆の国市 G A P 調査結果	44



## 資料1 伊豆の国市の歴史概要 – 重層する関連文化財群の時代と区域 –

### 1) 人の定着からイズノクニ形成への足跡 – 旧石器～平安時代 –

#### 1-a 旧石器・縄文・弥生時代

静岡県東部の愛鷹山南麓（沼津市・長泉町）や箱根山西南麓（三島市）は、旧石器・縄文時代の集中する地域として全国的に知られている。伊豆の国市東部は、箱根山に連なる多賀山地西麓の丘陵地帯が占めており、<sup>にらやま</sup> 韮山地区や<sup>おおひと</sup> 大仁地区で旧石器・縄文時代の遺跡が多く分布している。なかでも、大仁地区の<sup>うきはし</sup> 浮橋・<sup>ちようしやがはら</sup> 長者原などの丘陵部や<sup>たきよう</sup> 狩野川段丘上の<sup>みふく</sup> 田京・三福一帯は、縄文時代の集落が多く分布し、伊豆半島における中心地のひとつに位置づけられている。旧石器時代の人々は、小集団で狩をしながら移動生活をおくっていた。縄文時代になると、<sup>そうそうき</sup> 草創期～早期に次第に定住化の傾向がみられ、前期～中期に定住のムラをつくるようになる。

弥生時代になると、人々は水田耕作に適する低地部に居住地を移すようになり、<sup>えま</sup> 韮山地区などに多くの遺跡が見られる。伊豆の国市の弥生時代遺跡は、水田遺構が多く発見されていることで知られており、とくに<sup>やまき</sup> 韮山地区の山木遺跡は、学史上著名な遺跡である。市内で弥生時代の集落全体を調査した事例はないが、おそらくこの時期の集落は丘陵の縁辺部や自然堤防上に存在したと思われる。この頃になると集落・集団の格差が生まれ、有力集団の中でも階層の分化が進み、やがてそれらの中心指導者が、豪族や首長へと成長していったのであろう。

市内で旧石器～弥生時代の遺跡がとくに集中するのは、<sup>なかし</sup> 韮山城跡区域・<sup>おほひと</sup> 大仁区域・<sup>えま</sup> 江間区域・<sup>なごや</sup> 奈古谷多田区域の4区域である。

#### 【大仁区域】

旧石器時代の遺跡は、丘陵上で多くの遺跡が発見されているが、とくに<sup>さきご</sup> 笹子遺跡ではナイフ形石器・搔器・台形様石器などのまとまった石器群が注目されている。

縄文時代の遺跡では、三福の<sup>なかみち</sup> 仲道 A 遺跡で、草創期・中期の集落が発見されており、とくに復元土器2点を含む草創期縄文土器は、県指定文化財になっている。また、中期の住居跡12軒がみつかり、同様に中期の<sup>はいせきい</sup> 配石遺構や土器集積遺構などがある<sup>こうぞうめん</sup> 田京の公蔵免遺跡などとともに、大きな集落が形成されていたことと考えられている。いっぽう、東部の丘陵地帯では、<sup>おおびら</sup> 大平 A 遺跡・<sup>かやの</sup> 茅野 B 遺跡などで、早期～中期の住居跡、<sup>ろけつ</sup> 炉穴、<sup>しゅうせきどこう</sup> 集石土坑などが発見されており、本格的な定住集落とはいえないが、季節的な定住化の兆しが認められる。

弥生時代の遺跡は非常に少ないが、<sup>だん</sup> 段遺跡で<sup>どうたく</sup> 銅鐸飾り耳片が出土し注目された。

#### 【江間区域】

旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、<sup>ゆがほらやま</sup> 湯ヶ洞山遺跡で、ナイフ形石器・<sup>そうき</sup> 搔器・<sup>せきかく</sup> 石核などが多数発見され、それがいく



仲道 A 遺跡 縄文土器



大平遺跡縄文土器

つかの「ブロック」と呼ばれる集中箇所を形成していることが注目されている。

弥生時代には、低地で水田が営まれたことが、八ツ島遺跡<sup>やっしま</sup>の調査で明らかになっている。

#### 【葦山城跡区域】

弥生時代～古墳時代の著名な遺跡として、山木遺跡がある。発掘調査によって、水田や方形周溝墓<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>などがみつき、多数の土器や木製品が出土している。出土遺物のうち、当時の農耕技術や建築物を示す貴重な木製品・土器が「山木遺跡出土の生産・生活用具」として国指定重要有形民俗文化財になっている。

#### 【奈古谷・多田区域】

縄文時代の遺跡は、台地の先端部にいくつか点在するが、まとまった集落遺跡はまだ発見されていない。神崎遺跡<sup>かみざき</sup>では、敷石住居跡が1軒みつかっている。

弥生時代の遺跡では、葦山城跡地区同様、水田や方形周溝墓がみつかった奈古谷低地遺跡<sup>なごや</sup>や神崎遺跡などがある。

### 1－b 古墳・奈良・平安時代

豪族・支配者層の出現とともに、伊豆の国市内でも5世紀から7世紀にかけて丘陵部や台地の先端部に前方後円墳・円墳などがつくられるようになる。7世紀後半から8世紀前半にかけては、江間区域や大仁区域では、崖面に横穴を掘った横穴墓群<sup>よこあなぼ</sup>がつけられる。

律令時代に入ると、天武9年(680年)に駿河国から伊豆国が分置され、大宝律令公布(701年)の頃、田方<sup>な</sup>・那賀<sup>な</sup>・賀茂<sup>か</sup>の3郡が置かれた。伊豆の国市は田方郡に含まれる。また、仏教が東国にも普及し、宗光寺<sup>そうこうじ</sup>が建立され、伊豆国分寺の瓦が市内の瓦窯<sup>がよう</sup>で生産された。奈良時代前半の神亀元年(724)には安房国<sup>あわ</sup>などとともに伊豆国は遠流の地となり、政争の敗者たちが流人として伊豆に送られている。

市内では奈古谷多田区域・江間区域・伊豆長岡区域・大仁区域に古墳や横穴群が分布し、伊豆長岡区域に瓦窯がある。また、概期の集落は市内各所でみつかっている。

#### 【奈古谷・多田区域】

多田大塚古墳群<sup>ただおつか</sup>は、5～6世紀に築かれた16基からなる古墳群である。このうち、大塚4号墳から太刀<sup>たち</sup>・鉄鏃<sup>てつぞく</sup>・鏡<sup>たんこう</sup>・短甲<sup>ぼく</sup>・馬具<sup>ばぐ</sup>など、当時の権力を示す副葬品が出土している。また、大塚6号墳からは盾<sup>たて</sup>をもつ人物埴輪<sup>じんぶつはにわ</sup>の一部と、円筒埴輪<sup>えんとうはにわ</sup>が多数出土している。

#### 【江間区域】

江間区域北部の山麓には、横穴墓が多数つくられている。巨大な家型石棺<sup>いえがたせつかん</sup>が納められていた大師山横<sup>たいしやまよこ</sup>



白石の石棺



大北横穴群

あなぐん  
穴群（10基）や、いしびつ  
石櫃に火葬した骨が納められ  
ていた大北横穴群（48基）など、7世紀末～8  
世紀前半にかけての多様な墓制をみることのでき  
る重要な遺跡で、「北江間横穴群」として国史跡  
に指定されている。また、大北横穴24号墳から  
出土した「若舎人」の文字が刻まれた石櫃は、国  
の重要文化財となっている。

【伊豆長岡区域】

伊豆長岡区域の源氏山にも、江間区域同様多くの横穴群がつくられている。

ほら  
洞古墳は、東日本地域では非常に珍しい横口式  
せきかく  
石槨という埋葬設備をもつ。現在は石槨のみ残っ  
ており、「白石の石槨」と呼ばれている（市指定  
文化財）。

おさか  
小坂にある駒形古墳では、人物埴輪が出土して  
おり、市内唯一の前方後円墳である（市指定文化  
財）。

はなさかしまほしこようし  
花坂島橋古窯址は三島市にある伊豆国分寺の瓦  
を生産した遺跡である。瓦とともに須恵器も焼い  
ており、そのうち、小型の壺は長岡京や平安京に  
も運ばれている。

【大仁区域】

大仁区域の北部では、ひらいし よこやまだん  
平石古墳・横山段古墳群・  
ふじみめおとづか  
富士見夫婦塚古墳群など、古墳時代後期から終末  
期の小規模な群集墳がみられる。また、かみしま  
神島にあ  
る笠石山洞穴遺跡は、発掘調査によって古墳時代  
中期の埋葬施設であることが確認され注目されて  
いる。

ひろせ  
広瀬神社は、平安時代の「延喜式神名帳」に  
見られる古社で、きさきしん みしまみぞ  
三島神の後神といわれる三島溝  
くひめのみこと  
織姫命を祀る。しんかいちようじゆいち  
神階帳従一位広瀬の明神といわれ  
た。



多田大塚4号墳出土品



駒形古墳出土人物埴輪

## 2) 武士の世のはじまり・中世の東国動乱の要の地 ― 鎌倉・南北朝・室町時代―

源頼朝は、父義朝が平治の乱に敗れた翌年、永暦元年（1160）に伊豆国蛭ヶ小島（韮山城区域）に配流された。その後、北条時政の女子政子と結婚して北条館（守山区域）に移った。

治承4年（1180）、頼朝は平氏追討を命じる以仁王の令旨を受けて挙兵した。8月17日夜、北条時政らは北条館から荊木（原木）・肥田原（函南町肥田）・「牛鋤大路」を経て、山木に館を構えていた平家方の平（山木）兼隆、多田に館を構えていた兼隆の後見人堤信遠を襲った。平兼隆の居館跡は韮山城跡区域の香山寺付近に比定される。この挙兵が頼朝の東国支配、ひいては鎌倉幕府草創の端緒になった。日本の中世史は、本市域で始まったともいえる。

挙兵には時政を初めとして伊豆の武士が多く加わった。市域では、江間に本拠を置いていた北条義時、長崎の近藤国平、天野の天野遠景らがある。初代鎮西奉行となる天野遠景の居館跡は伊豆長岡区域天野地区の東昌寺付近に比定されている。南江間の北條寺は義時との縁が深い。のちに北条氏本家（得宗家）の従者「御内人」として活躍する長崎氏・南条氏は、長崎地区・南條地区を出自とする。長崎氏は、円喜（光綱）・高綱・高資の3代にわたり、北条高時の時代の幕府政治を左右したことで知られ、南条時光は日蓮の支持者として知られる。市域出身の武士たちは、鎌倉幕府の草創期だけでなく、その後の展開のなかでも重要な役割を果たした。

北条氏の本拠、守山区域の北条館（史跡北条氏邸跡）からは東国では珍しい中国北宋時代の白磁が出土しており、平安後期には繁栄していたことがわかる。北条時政は文治5年（1189）、奥州藤原氏征討の戦勝祈願のため願成就院を建立した（史跡願成就院跡）。本尊の木造阿彌陀如来坐像以下5体の仏像は文治2年（1186）に時政が奈良仏師運慶に製作を依頼したもので、平成25年6月国宝に指定された。時政はその前年、源義経事件の收拾のために上洛し、守護・地頭の設置を勅許されている。当時、運慶は、父康慶とともに平重衡の焼き討ちで喪われた奈良の諸仏像の製作にあたっていた。その後、北条義時・泰時は南新御堂・北塔を整備し、願成就院は北条氏の本拠地における中心施設となった。

鎌倉中期になると北条氏の本拠は鎌倉に移ったが、伊豆の居館も引き続き維持されていた。寛元4年（1246）、前将軍藤原頼経と結んで執権北条時頼を陥れようとした北条名越家の光時が失脚し、かつての義時の居館とみられる「伊豆国江間宅」に幽閉されている。

鎌倉幕府の滅亡後、北条高時の母、覚海円成（円成尼）は後醍醐天皇から「伊豆国北条宅」を安堵され、北条氏一門の女性たちを率いて鎌倉から伊豆に移った。円成尼は「北条宅」を円成寺という尼寺に改めた。守山区域の円成寺伝承地の発掘調査は平成4年（1992）から続けられており、鎌倉期から室町期にかけての建物跡、円成寺とみられる堂跡と付属の園池が発見された（史跡円成寺跡）。円成寺は



北条氏邸跡出土 中国製天目茶碗



願成就院 山門

15世紀後半には堀越御所(史跡伝堀越御所跡)と併存しており、「伊豆国北条宅」の中心部分は史跡伝堀越御所跡の下層に埋蔵されている可能性がある。

頼朝に始まる幕府草創の記憶やイメージは、本市域にその後も強い影響を残した。

鎌倉幕府崩壊直後の元弘3年(1333)、足利尊氏は生母、上杉清子の兄憲房に「奈古屋郷地頭職」を与えた。建武3年(1336)に憲房が戦没したあと、嫡子にあたる鎌倉執事(関東管領)上杉憲頭は、暦応年間(1338～1342)に奈古谷に国清寺を建てた(奈古谷・多田区域)。『平家物語』には、源頼朝に平氏追討を勧めた文覚上人が奈古谷に庵を結んでいたとある。今川了俊の『難太平記』は、上杉憲房が足利尊氏に鎌倉幕府打倒を勧めたと伝える。義堂周信の『空華集』には、国清寺は文覚上人の旧居に建てられたとある。これらの伝承から、関東管領山内上杉氏は自らを文覚の伝説に重ね合わせて意識し、国清寺を開いたことがわかる。

文和2年(1353)、上杉氏を斥けて畠山国清が鎌倉執事となった。国清は北条義時と縁の深い南江間の北條寺付近に吉祥寺を開いた(江間区域)。康安元年(1361)、国清は鎌倉公方足利基氏に斥けられ、神益城(金山城・大仁区域神島地区)・三戸城(沼津市三津)・立野城(伊豆市小立野)に拠って抵抗したが敗れた。上杉憲頭が関東管領となり、国清の子弟は京都に逃れて将軍の側近となった。のち、国清の甥基国が幕府管領となり三管領家畠山氏となる。

国清寺は山内上杉氏の菩提寺のひとつで、山内上杉氏の本拠に隣接する鎌倉山内の円覚寺・建長寺から僧が来て住持を務めた。この周辺に、伊豆国の守護所が置かれたという説もあり、応永23年(1416)の上杉禅秀の乱では戦場になった。一方、15世紀には関東管領の姉妹が円成寺の住持を務めており、北条氏の支配を継承する者の責務として、その鎮魂にあたらしい。

上杉禅秀の乱後、幕府と鎌倉府との対立は激化し、永享10年(1438)の永享の乱で鎌倉公方足利持氏が滅亡する結果となった。関東管領山内上杉憲実は苦慮して国清寺に隠退し、大仁区域に蔵春院を建てて籠もった。その後、持氏の子成氏が鎌倉公方となり、憲実の子憲忠が関東管領になったが、不和は続いた。憲実は絶望して伊豆を去り、流浪の旅に出た。

享徳3年(1454)、公方足利成氏が管領上杉憲忠を殺害し、鎌倉府は公方勢力と管領上杉勢力とに分裂した(享徳の乱)。長祿元年(1457)、将軍足利義政は古河に移った足利成氏(古河公方)に替えて、庶兄足利政知を「関東主君」に定めた。翌年、政知は下向して国清寺に本拠を置き、長祿4年以後、

円成寺に隣接して堀越御所を営み、堀越公方と呼ばれることとなる。戦いが有利に展開せず鎌倉に入れなかったことも理由のひとつだが、かつての北条氏の権威を引き継ぎ、上杉氏と結んで関東に君臨する姿勢を示すという狙いもあったとみられる。

堀越御所跡の発掘調査では園池や遣り水の跡が見つかり、御所を囲む堀も確認されている。居住施設はまだ調査されていないが、寝殿造の主殿が建てられていたことが予想される。当時は和風建築が寝殿造から足利義政の東山殿(現慈照寺)に代表される書院造へと移行する時期にあたり、建築史的にも重

円成寺に隣接して堀越御所を営み、堀越公方と呼ばれることとなる。戦いが有利に展開せず鎌倉に入れなかったことも理由のひとつだが、かつての北条氏の権威を引き継ぎ、上杉氏と結んで関東に君臨する姿勢を示すという狙いもあったとみられる。

堀越御所跡の発掘調査では園池や遣り水の跡が見つかり、御所を囲む堀も確認されている。居住施設はまだ調査されていないが、寝殿造の主殿が建てられていたことが予想される。当時は和風建築が寝殿造から足利義政の東山殿(現慈照寺)に代表される書院造へと移行する時期にあたり、建築史的にも重



円成寺跡出土 宝珠形水晶製品



国清寺

要な遺跡といえる。

応仁の乱後、京都では將軍足利義尚の後継者の地位を巡って、政知の子義澄を推す細川政元（勝元の子）らと、足利義視の子義植を推す勢力とが対立した。政知は義澄を將軍に、同母弟の潤童子を堀越公方にしようとした。しかし、延徳3年（1491）に政知が没すると、義澄の異母兄弟茶々丸が潤童子と継母の円満院殿武者小路氏を殺して堀越公方になった。

明応2年（1493）、京都で義澄が將軍に擁立されると、義澄に与する伊勢宗瑞（北条早雲）が駿河守護今川氏親の援助を受けて進攻し、茶々丸と戦った。茶々丸は明応4年に堀越御所から敗走したが、関東管領兼伊豆守護であった山内上杉顯定の援助を受けて抵抗を続けた。茶々丸は明応7年（1498）の東南海地震とこれに起因する大津波による混乱のなかで、同年8月に敗死した。宗瑞は山内上杉顯定との戦いを続け、相模へ進攻してゆく。

伊勢宗瑞の子氏綱は大永4年（1524）頃に改姓して「北条氏綱」と名乗るようになる（後北条氏）。江戸城を奪取して関東武士の反発を買ったため、鎌倉北条氏の継承者であると主張することで自らを正当化しようとしたと考えられている。本市域を支配することが東国支配の正当化と結びついていた、という点に中世東国の政治権威の特徴がある。

### 【守山区域】

守山北側に展開する北条氏邸跡（円成寺跡）（国指定史跡）は、北条氏の館跡である。平成4年からつづく発掘調査によって、規則的に並ぶ建物跡や中国製陶磁器、大量のかわらけなどが出土し、平安時代末から鎌倉時代の武士の館跡が明らかになった。北条氏邸跡の遺構と重なるように、円成寺の遺構が発見されている。発掘調査では堂や池がみつかり、仏具などの出土品も多数発見された。

北条氏の氏寺である願成就院跡（国指定史跡）は、『吾妻鏡』によれば、文治5年（1189）、源頼朝の奥州藤原氏攻めの成功を祈願して建立されたと記されている。木造阿弥陀如来坐像他、運慶製作による仏像5体が伝わり、「願成就院の運慶作諸仏」として国宝に指定されている。仏像の胎内からは銘札が発見され、そこには文治2年（1185）、北条時政の発願により運慶が製作したことが書かれている。造立年代は『吾妻鏡』の記事との齟齬が生じており諸説あるが、いずれにしても北条氏の氏寺として建立され発展していった寺であることは明らかである。発掘調査も行われており、堂の一部や屋根に葺かれた多数の瓦がみつかり、

堀越公方足利政知の御所であった伝堀越御所跡（国指定史跡）は、発掘調査によって池や遣り水などが発見され、京ゆかりの公方の雅な暮らしの一端が明らかになっている。

守山地区には中世から続く寺院が多い。頼朝亭跡と伝えられる光照寺、武田信光の伝承をもつ信光寺など、中世史と深い関わりをもつ。また、石塔も多く残されており、眞珠院の中世在銘石造物群（市指定文化財）のうち、定仙大和尚塔と呼ばれる五輪塔には「正安4年（1304）」の銘が刻まれている。この紀年銘は静岡県内の五輪塔に刻まれたものの中では最も古い銘である。

### 【江間区域】

北条義時は「江間四郎」または「小四郎」と呼ばれており、江間に館があったとされるが、その場所はまだ不明である。北條寺には北条義時夫妻の墓（市指定文化財）が残されている。このほか、北條寺には、鎌倉時代はじめ頃に製作された阿弥陀如来坐像（県指定文化財）や室町時代に宋風様式を取り入れた観音菩薩像（県指定文化財）などがある。また、牡丹鳥獸文繡帳は北条政子の寄進と伝えられる。

### 【奈古谷・多田区域】

奈古谷の中心に位置する国清寺は、南北朝以降伊豆国守護となった関東管領山内上杉氏が、無礙妙謙を開山に迎えて暦応年間（1338～1341）に創建した氏寺である。境内には創建に関わる「妙謙」の

名を記した貞和4年(1348)銘の宝篋印塔をはじめ、14～15世紀の石塔が残されている(「開山塔」・「開基塔」など)。国清寺周辺は、上杉氏の伊豆における最大の拠点であり、守護所に準じる場所であった。そのため、上杉禅秀の乱や永享の乱の折など、鎌倉における政争の歴史の舞台のひとつともなっている。また、堀越公方足利政知が一時拠点としたこともあった。

国清寺周辺には国清寺本堂の木造釈迦如来坐像(市指定文化財)、毘沙門堂山門の木造金剛力士像(県指定文化財)、鰐口(市指定文化財)、観音堂十王像(市指定文化財)など、重要な美術工芸品が存在する。

また、国清寺から毘沙門堂に向かう道筋には、地藏像や種字を刻んだ磨崖仏等が多く存在する。至徳2年(1385)銘の弘法石、明徳2年(1391)の大日石など、年号が刻まれているものもあり、歴史的価値も高い(市指定文化財)。奈古谷地区は、市内では守山周辺に次いで石塔類が集中して分布する地域である。かつて国清寺の子院であった徳隣院・松月院・観音堂境内の他、道沿いや個人宅に、石塔類が祀られている例が多くみられる。

### 【伊豆長岡区域】

源頼朝の挙兵に従った天野遠景は、伊豆長岡地区の天野に本拠とする武士である。頼朝から最も信頼されていた家臣のひとりであり、後に鎮西奉行に任ぜられる。東昌寺には、天野氏の墓(市指定文化財)といわれる石塔が残されている。

伊豆長岡地区の寺には、平安時代～鎌倉時代の歴史に関わる伝承が多く残る。西琳寺には、以仁王とともに京で反平氏の兵をあげた源頼政の妻である菖蒲御前の供養塔(市指定文化財)、最明寺には5代執権北条時頼の墓(市指定文化財)と伝えられる石塔がある。宗徳寺の卷子本「紺紙金字法華経」十巻(県指定文化財)には、建治2年(1276)の年号が記されている。

古奈温泉は、鎌倉～室町時代から著名な温泉であり、『吾妻鏡』には、嘉禎2年(1236)、将軍藤原頼経が「小名温泉」へ行く計画があったこと、仁治元年(1240)、幕府の医者である丹波朝臣良基が「小那温泉」で没した記事などがある。

### 【大仁区域】

南北朝時代の康安元年(1361)、鎌倉公方足利基氏に背いた畠山国清は大仁区域神島にある神益城(金山城)、三戸城(三津城)、立野城(修善寺城)に立てこもり鎌倉公方の軍と戦った。神益城の場所については、城山(標高342m)とする説と、棒石山(標高121m)とする説があり特定されていない。また、龍源院の一角には脇屋義治を祖とする脇田家一族の墓所がある。脇屋義治は南北朝時代に活躍した新田義貞の甥である。

蔵春院はかつて修禅寺・最勝院とともに伊豆の三名刹といわれた。永享11年(1439)、主君足利持氏を死に追いやった関東管領上杉憲実は、持氏追悼の寺として蔵春院を建立した。

### 【菰山城跡区域】

鎌倉～室町時代の文化財はあまり多くはないが、平(山木)兼隆館跡の推定地や源頼朝の配流地である蛭ヶ小島比定地は、この区域に含まれる。蛭ヶ小島には、寛政2年(1790)、秋山富南の撰文により建立された蛭島碑が建てられている。また、伝来の経緯は定かではないが、円成尼が鎌倉東慶寺に寄進した梵鐘(県指定文化財)が本立寺に残されている。



本立寺 梵鐘

### 3) 戦国時代の幕開けから天下統一布石の地へ ー戦国・安土桃山時代ー

明応4年(1496)、足利茶々丸は堀越御所を捨てて南伊豆に逃れ、伊勢宗瑞が本市域に拠点<sup>むなふだ</sup>を置いた。茶々丸滅亡後の明応9年(1500)、葦山城内の「権現曲輪」<sup>ごんげんくわわ</sup>に熊野神社を勧請した際の棟札<sup>むなふだ</sup>が伝わり、葦山城の成立がわかる。宗瑞は永正16年(1519)8月15日に没する直前まで「葦山殿」と呼ばれており、生涯を通じて葦山城を本拠とした。伊豆一国の行政を司る郡代には、宗瑞が備中から連れてきた従者、笠原氏・清水氏があてられた。

宗瑞の生前、後北条氏と今川氏とは強い提携関係にあった。駿府に拠る甥の今川氏親は遠江・三河に兵を進め、宗瑞の嗣子<sup>しし</sup>氏綱は小田原に拠って相模に兵を進めた。葦山城の宗瑞は氏親・氏綱を助けて東奔西走し、氏親と協力して甲斐国都留郡にも出陣した。

宗瑞・氏親が没して暫くすると、後北条氏と今川氏の提携は緩み、武田氏の勢力が強まった。葦山城は後北条領国の西辺を守る軍事基地の役割も担うようになった。

まず、後北条氏と今川・武田連合軍との戦い、「河東一乱」<sup>かとういちらん</sup>が起こった。天文5年(1536)に今川氏親の嗣子<sup>うじてる</sup>氏輝が急死したことに端を發して後継者争い(花蔵の乱)<sup>はなくら</sup>がおこった。これを制した今川義元<sup>よしもと</sup>は、それまで敵対していた武田信虎の女子を娶って後北条氏に敵対した。北条氏綱・氏康は葦山城を拠点として駿東郡・富士郡に出兵した。天文14年(1545)、北条氏康は今川義元・武田晴信(信玄)<sup>はるのぶ しんげん</sup>に敗れ、その後、いわゆる三国同盟と呼ばれる提携が成立した。駿河東部から伊豆北部にかけての地域は軍事的な小康状態となり、後北条氏は武蔵・上野へ、武田氏は信濃へ、今川氏は三河へと勢力を広げていった。

永禄3年(1560)、今川義元が桶狭間の合戦に倒れると、間もなく武田信玄が三国同盟を破棄した。永禄11年(1568)、信玄は徳川家康と結んで義元の子氏真<sup>うじまね</sup>を攻め、氏真はたちまち駿河・遠江を失った。氏真は後北条氏の軍に収容されて掛川城(掛川市)から徳倉城(駿東郡清水町)に移り、北条氏康・氏政父子と信玄は駿東郡から伊豆北部を舞台として激しく戦った。

元龜3年(1572)、上洛を図る信玄と北条氏政との間に甲相同盟が結ばれて、後北条氏と武田氏との抗争はいったん中断した。しかしながら、天正6年(1578)、上杉謙信の後継者争い(御館の乱)<sup>おたて</sup>に端を發して氏政と武田勝頼は再び抗争を始め、天正10年(1582)、武田氏が滅亡するまで続いた。武田氏の軍勢は繰り返し葦山城に攻め寄せ、駿河湾では両氏の水軍が海戦を展開した。武田勝頼は三枚橋城(沼津市)を、北条氏政は長浜城(沼津市)を設けて、安宅船<sup>あたけぶね</sup>と呼ばれる大型軍船を配備した。葦山城は後北条氏当主の直轄だったが、武田氏との抗争に際して、三浦半島の三崎城将として水軍を指揮していた北条氏規<sup>うじのり</sup>が派遣された。要塞としての葦山城の構造は大きく変化し、堅固で巨大なものになった。

葦山城と城下(内宿)の構造も大きく変貌した。初め、四日町(守山区域)には年貢を収納する大名の蔵があり、国清寺の門前にあたる奈古谷・多田区域には職人が集住していた。武田氏の侵攻から守るため、四日町とみられる「市庭口」<sup>いちぼぐち</sup>には防備が設けられた。年貢を収納する蔵は城内に移され、城下集落(内宿)も駿河側からみて背後にあたる山木地区に営



伊豆国田方郡葦山古城図

公益財団法人江川文庫所蔵

まれ、城の東から伊豆東海岸に通じる街道が営まれて、小田原城との連絡が図られた。

天正 10 年（1582）の武田氏の滅亡後、織田信長は駿河を徳川家康に与えた。同じ年、信長が本能寺に倒れると、家康と後北条氏は甲斐・信濃を巡って争った。ついで、家康は後北条氏と和睦して羽柴（豊臣）秀吉との対決を志した。天正 12 年（1584）、家康は小牧・長久手の合戦で秀吉軍の一部を破ったが、外交的な駆け引きの結果、秀吉に臣従した。家康の方針転換を警戒して、韮山城では天正 13 年（1585）から同 14 年（1586）にかけて大規模な普請が行われた。

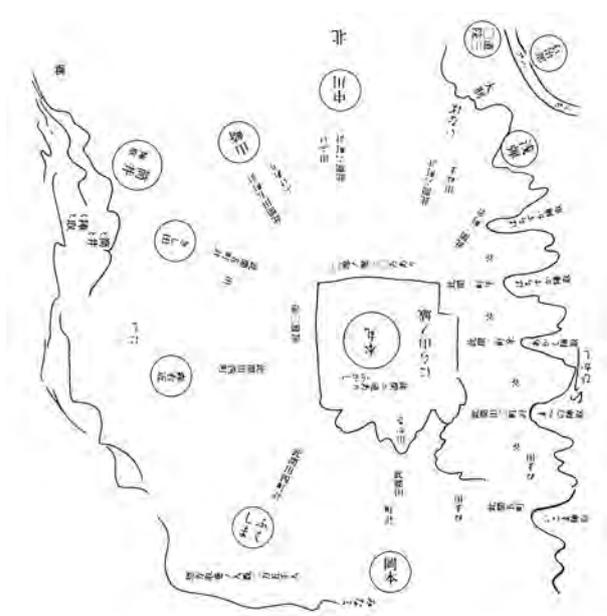
秀吉は天正 13 年に四国を、天正 15 年（1587）に九州を平定し、全国統一の最後の障害は後北条氏となった。天正 16 年（1588）から 17 年（1589）にかけて、徳川家康が和平交渉を勧め、北条氏規が上洛して秀吉と対面する動きもあったが、前当主の北条氏政（当主氏直の父）が消極的な態度に終始し、障壁となった。天正 17 年 11 月、上野国沼田領を巡る後北条氏の違約をきっかけとして交渉は破綻し、秀吉は後北条氏討伐を宣言した。

天正 15 年頃から、後北条氏は小田原城を初めとする城郭の修築を大々的に進めていた。秀吉軍の主力が来攻すると予想された箱根山周辺には、韮山城・山中城・足柄城を中核として多数の城郭が設けられた。天正 17 年 12 月、拠点城郭への兵糧の集積と軍勢の集中が開始され、韮山城には北条氏規が入城した。後北条氏の軍勢は、豊臣方の推計で 3 万 5 千騎と伝える。韮山城・山中城にはそれぞれ 3500～4000 人程の兵が立て籠もったらしい。

天正 18 年（1590）3 月 1 日、秀吉は 21 万余と伝える軍勢を率いて京都を出陣した。韮山城は 3 月 28 日に織田信雄ら 4 万 4000 人の兵に包囲された。東海道箱根道を遮断する位置にあった山中城は小田原への突破口に選ばれた。山中城は 3 月 29 日に羽柴秀次の率いる 7 万人余りの軍勢による猛攻を受けて半日で落城した。秀吉は 4 月 5 日に箱根湯本の早雲寺に本陣を置き、各方面から進攻した軍勢が集合して、同月中旬までに小田原城の包囲が完了した。

後北条氏は、長大・堅固な堀と土塁によって「惣構」と呼ばれる大規模な防御線を展開し城下町を囲い込む手法を編み出した。小田原城の「惣構」は大都市を城郭内部に取り込む点で近世城下の先駆けとなる。小田原征討後に秀吉が京都市街を囲む「御土居」を建設するきっかけになったとも言われている。一方、備中高松城の水攻めや因幡鳥取城の兵糧攻めで知られるとおり、秀吉の攻城戦は籠城側の外部との連絡を遮断する包囲陣地「付城」を大規模に構築する点に特徴がある。このように、籠城側も攻城側も、大土木工事によって大きな効果を挙げる戦術の達人であり、韮山城・小田原城の攻防では、双方の戦術が真っ向からぶつかりあった。韮山城の場合には攻防両者の兵力がかけ離れていたが、秀吉軍は強攻を避けて多数の付城を築き、あえて持久戦法をとった。小田原城には農民や町人も多数立て籠もっていたが、後北条氏は郷村の食料を徹底的に城内に運び込ませていたため、持久戦に対応できた。韮山城は 6 月 24 日、小田原城は 7 月 6 日まで持ちこたえた。

韮山城は近世を通じて江川家の御囲地であったため、後世の改変が比較的乏しい。韮山城と周辺の付城群はまだ史跡として指定されてはいない



小田原陣之時 韮山城仕寄陣取図 模式図  
(静岡県史 資料編中世四より)

が、天正 18 年に攻防両者が築いた陣地が良好に遺存している点に、全国的にみて貴重な価値がある。今後の保存と活用の方策を考えるためにはなお学術的な調査を進める必要があるが、地形的に比較的立ち入りやすく、史跡整備の成果を市民や来訪者が享受するという点でも有利な条件になっている。

### 【葦山城跡区域】

葦山城跡は、本城とそれらを取り囲む丘陵地帯を含む約 98 万㎡の広大な城郭である。本城や丘陵には、土塁や堀など当時の遺構が良好に残っている。低地部分では、発掘調査が行われており、堀や屋敷地、道路、庭園跡などがみつまっている。

東側の丘陵部には、葦山城を包囲した豊臣軍が築いた付城が残っている。現在、<sup>たいこうじんばつけじろあと</sup>太閤陣場付城跡・<sup>ほんりゆうじつけじろあと</sup>本立寺付城跡・<sup>おっこしやまつつけじろあと</sup>追越山付城跡・<sup>かみやまだつけじろあと</sup>上山田付城跡・<sup>しょうけいんつけじろあと</sup>昌溪院付城跡の 5 つの付城跡が埋蔵文化財包蔵地に登録されている。葦山城と付城跡群をあわせて、天正 18 年（1590）の攻防を示す遺跡がまとまって残っていることが重要である。

本立寺は、永正 3 年（1506）<sup>えがわ</sup>江川家 24 代<sup>ひでもり</sup>英盛が邸内にあった<sup>だいじょうあん</sup>大乘庵を移して建立されたと伝えられる。香山寺は平（山木）判官兼隆建立の寺といわれている。境内には、室町時代から戦国時代にかけての<sup>ろくじぞうせきどう</sup>六地藏石幢や石塔残欠が残る。伊勢宗瑞が再興したという伝承もある。また、葦山城東側の金谷、山木の集落は、古いたたずまいを残しており、葦山城の内宿（城下町）であった可能性が指摘されている。

### 【奈古谷・多田区域】

戦国時代になって国清寺は前代よりも衰えたが、寺が抱えていた職人集団はこの地に残った。後北条氏はこれらの職人を葦山城の整備や経営を支える集団として組織したことが文献史料から知られている。

### 【守山区域】

下田街道は戦国時代においても交通・流通の動脈であった。四日町には市があり、後北条氏の蔵が建てられていた。四日町の市は、<sup>くぐつ</sup>傀儡（人形つかい）も集まるような賑わいのある市であり、永禄 12 年（1569）に武田氏が葦山城を攻めた時には、市周辺に火をかけられている。

天正 18 年（1590）の豊臣軍の葦山城攻めの折には、願成就院に軍勢の<sup>ろうげき</sup>狼藉を封じるための<sup>せいさつ</sup>制札が出された。



上山田付城跡と追越山付城跡

#### 4) 幕府直轄の代官支配地 —江戸時代—

近世に葦山代官を世襲した江川家は、「伊豆衆」として編成された北条氏の家臣として、また、大和の「天野」・「菩提山」と並び称された銘酒「江川酒」の醸造家としてたちあらわれる。本立寺には下総しもうさ国府台合戦で活躍したと伝えられる江川英元ひでもとの五輪塔(墓石)があり、永禄4年(1561)の年紀がみえる。北条氏政は上杉謙信・織田信長に「江川酒」を贈っており、家康以後、元禄期にいたるまで江川家は徳川將軍家への献上酒の製造を続けた。

江川英吉ひでよしは北条氏規とともに葦山城に立て籠ったが、その子英長ひでながは徳川家康に仕えた。天正18年(1590)、英長は葦山城の開城交渉にあたり、氏規の助命に貢献したという。また、英長はのちに和歌山藩の開祖徳川頼宣よりのぶ・水戸藩の開祖徳川頼房よりふさを産む養珠院(お万の方)が家康の側室となる際にその養親となり、將軍家とも親密な関係となった。

家康の関東入封後、葦山城には家康の異母弟と伝えられる内藤信成ないどうのぶなりが入封し、現市域を中心として1万石を領した。葦山城の城郭としての利用の最終段階にあたり、遺構の現況はこの時期の整備状態を引き継いでいる。これに併行して、江川家は慶長元年(1596)に葦山城跡区域を中心とする5千石を管轄する代官となった。

信成は関ヶ原の合戦の翌年慶長6年(1601)に駿府城すんぶじょうに移封され、伊豆国はいったん幕府の直轄とされた。寛永18年(1641)、伊豆の直轄領の支配は三島代官所に集約されたが、5千石を管轄する江川氏の代官支配は独立して維持された。このことは、江川家から將軍家へ献上する「江川酒」の製造と深い関係があると推察されている。

幕府の財政困難に端を発する享保改革の影響で、世襲代官としての江川氏の支配は享保8年(1723)にいったん中断した。しかしながら、葦山屋敷には江川氏の手代が駐在し、三島代官所の分庁舎として機能した。宝暦8年(1758)には三島代官が廃止され、翌年から江川英征ひでまさが葦山代官として伊豆・相模・甲斐5万石の天領支配にあたることとなった。今度は、三島代官所が葦山代官所の分庁舎となった。

現市域には旗本知行地の他、宝永4年(1707)の富士大噴火によって埋没した所領の替え地として給与された小田原藩大久保氏の領地、その支藩である荻野山中藩おぎのやまなかはんの支配地、安永6年(1777)に水野氏が入封した沼津藩の支配地、高崎藩の支配地があったこともあり、しばしば異動があった。伊豆長岡区域に設けられた荻野山中藩の支庁舎「古奈陣屋こなじんや」は幕末まで機能した。同一の村に複数の領主がいる相給も多く、自治体としての村が行政上で重要な役割を果たした。これらの事情は、近代における街の成り立ちにも影響を与えた。



江川家住宅 肥料蔵



江川家住宅 書院

三島代官廃止の理由は、代官本人が江戸に常駐していたため現地の取り締まりが不十分であるとされたことが原因である。宝暦年間以降（1751年～）の江川家の代官支配は行政官僚の性格が強く、近世前期の5千石の支配とは異なる。江川家に伝わる資料の多くは、宝暦年間以降のものである。在地と結びつきの強い江川氏が代官となったことは、伊豆地域の住民たちからも歓迎された。とはいえ、近世後期、領主財政の困難は江川家の場合も例外ではなく、江川英毅・英龍（坦庵）父子は沼津・小田原・荻野山中藩と協力して立て直しに努めた。英龍は小田原藩の財政立て直しに貢献した二宮尊徳の協力も仰ぎ、その助言を得た。

江川英龍は江戸の剣客岡田十松に剣術を、市河米庵・谷文晁に書画を学んだ多才な人物である。渡辺華山に師事してその主宰する蘭学者のグループ「尚函会」に参加し、高野長英・川路聖謨らと交わった。天保改革を主導した水野忠邦の信任が篤く、天保6年（1835）年に代官職を継ぐと、海防の重要性を訴えた。民情に配慮したことから幕府直轄領代官としての評価も高く、初め武蔵・相模・伊豆・駿河4カ国の5万4千石を管轄したが、天保9年には甲斐を併せて12万石、安政元年（1854）には26万石を管轄するに至った。

天保12年（1841）、長崎の町年寄で砲術家であった高島秋帆が武蔵国徳丸原で初めて洋式銃砲隊の展示演習を行い幕臣として登用された。このとき、江川英龍は秋帆の弟子となることを公認され、以後、西洋砲術の研究と伝習において全国的な中心人物となった。天保13年には西洋式銃砲の製造を許され、天保14（1843）年には幕府の鉄砲方を兼ねた。英龍から諸藩に提供された西洋式銃砲は諸藩における研究と製造を促進した。

葦山代官役所（江川家住宅）は、西洋砲術の伝習を中心とする教育機関としての機能を兼ねるようになり、近代化に貢献した。入門者には幕末外交に活躍する幕臣川路聖謨のほか、吉田松陰・勝海舟らの師となる佐久間象山（海防掛老中真田幸貫の家臣）などがある。現在の県立葦山高等学校は、この葦山塾の系譜をひくかたちでその礎が築かれた。

ペリー来航に先立つ嘉永2年（1849）、英龍は海防を意図して農兵設置を建議した。はじめ江川家管轄地だけに許されたが、各地の動乱状況の深まりのなかで、治安維持の必要性が痛感されるようになり、文久3年（1863）からは幕領各地で農兵の取り立てが進められるようになった。

### 【葦山城跡区域】

葦山城跡は、家康の関東入部後、葦山藩の城として支配の拠点となった。またこの区域には、葦山代官を世襲した江川家の私邸である重要文化財江川家住宅があり、およそ400年前に建てられたと推定



旧上野家住宅



旧上野家住宅内部

されている主屋<sup>しゅおく</sup>をはじめ、書院・仏間・門・土蔵などの歴史的建造物を見ることができる。江川家住宅の敷地を含む一帯は、江戸時代から明治時代中頃まで、地方行政における中心的な役割を果たした場所として、史跡<sup>しせき</sup>菫山役所跡<sup>しよあと</sup>となっている。また、江川家に伝わる古文書・書籍・書画・武具・写真などは、近世から近代の代官所の職務や支配のようすを伝える資料であるとともに、日本の政治・軍事・外交上の重要な資料であるとして、重要文化財に指定されている。

源頼朝の配流地である蛭ヶ小島比定地は、現在蛭ヶ島公園として整備されている。その一角に県指定文化財旧上野家住宅（伊豆の国市歴史民俗資料館）がある。これは、市内土手和田地区にあった江戸時代中期の民家を移築したものである。

#### 【大仁区域】

当区域内の吉田には、文化5年（1808）頃の建築と推定される国登録有形文化財旧菅沼家住宅<sup>きゆうすがぬまけじゆうたく</sup>（知半庵<sup>ちはんあん</sup>）がある。菅沼家は、江戸時代吉田村の名主を務め、明治・大正期には田中村の村長を務めた菅沼荘治<sup>そうじ</sup>を輩出した地元の名望家である。

区域内の江戸時代の様相を伝える資料として、寛政10年（1828）の神益中島村絵図<sup>かんますなかじまむらえず</sup>が市の有形文化財に指定されている。

### 江川家関係資料の重要性と保存・活用に向けての課題

公益財団法人江川文庫が所蔵・管理する江川家関係資料は、中世から近現代にいたる膨大な資料群であり、内容的にも古文書、書画、典籍、古写真、工芸、武器・武具類、染織など、多種多様な分野にわたっている。その重要性は以前から知られていたが、公開されている資料は一部にとどまり、全貌は明らかになっていなかった。

そうした中、静岡県教育委員会によって、平成14年度から18年度にかけて「江川文庫古文書史料調査」、平成19年度から23年度にかけて「江川文庫西蔵文書記録等史料調査」、さらに平成24年度に補遺調査が実施された。この都合11年間にわたる総合調査によって、計8冊の調査報告書が刊行され、およそ7万点におよぶ資料目録が公表されるに至った。

調査委員会の委員長を務めた宮地正人東京大学名誉教授は、江川家関係資料について「静岡県レベルの文化財では決してなく、幕府という近世国家の支配実態を現す無比の史料であるだけでもない。日本の近代化への必死の試みを幕府側から示す根本史料なのである」（『江川文庫古文書史料調査報告書六 古文書（五）』平成24年3月／静岡県教育委員会）と高く評価している。

これら資料のうち、とくに重要な38,581点が「菫山代官江川家関係資料」として、また古写真461点が「江川家関係写真」として、平成25年6月19日付の官報告示をもって、国の重要文化財に指定された。今後、江川家関係資料を用いた様々な研究の進展が期待されるとともに、資料の適切な保存と公開を図っていく必要がある。

そのために、公益財団法人江川文庫では、収蔵施設の建設に向けた準備を進めている。収蔵施設の建設に伴って課題となるのが、研究・公開・活用方策の検討である。伊豆の国市としても、江川家関係資料のみならず、市内に豊富に存在する歴史文化資源の保存・研究・公開・活用の拠点となる施設について、整備方針の策定や専門的な人材の確保を含めて、本格的な取り組みが求められている。

## 5) 近代産業への飛躍の地 ―幕末・明治・大正・昭和時代―

葦山代官江川英龍は老中水野忠邦の信任を得て、天保9（1838）年から幕府の江戸湾防備計画に参画した。天保飢饉（1833・1835～37）とアヘン戦争（1840～42）という内憂外患に直面した幕府は天保12（1841）年にいわゆる天保改革を開始した。同年、英龍は高島秋帆の弟子となることを許され、以後、西洋砲術の教習の中心になるとともに、配下の鑄物師に命じて諸大名から依頼された銃砲の製造を行った。英龍は兵糧としてパンの製造を試みたことから、「パン祖」としても知られる。市域において近代産業史の胎動が始まったことについて、江川英龍の果たした役割は大きい。

砲台に装備する大型の火砲、とりわけ鉄製の火砲を大量生産することは、在来の技術では困難であった。このため、オランダ語技術書『ライク王立鉄製大砲鑄造所における鑄造法』（ヒュゲーニン著）に基づいて、葦山をはじめ各地で反射炉の建造が進められた。英龍は天保13年（1842）に高島秋帆から入手して訳出させ、反射炉の製作実験を開始した。

西南雄藩のうち、佐賀藩は幕府直轄領である長崎の防備を担当しており、佐賀藩主の鍋島直正は嘉永元年（1848）年から英龍と交流して技術指導を受けた。佐賀藩の反射炉は英龍に弟子入りした佐賀藩士本島藤太夫が責任者として嘉永3年（1850）に築造したもので、英龍の部下の鑄物師長谷川刑部が赴き鑄造を指導した。のちに葦山において反射炉を築造する際には、老中阿部正弘の要請により佐賀藩から派遣された技術者が協力した。

葦山反射炉は嘉永6年（1853）、ペリーの初来航の直後に幕府の命令で築造が開始された幕府の洋式工場にあたる。同年、英龍は幕府が設けた江戸湯島銃砲製作所の指導にもあたった。同じ時期、英龍は品川台場の建設を担当（安政元年（1854）完成）しており、葦山反射炉は湯島の銃砲製作所とともに江戸城を守る台場に装備する大砲の鑄造を目的としていた。葦山反射炉は、いったん完成したあと安政元年（1854）の大地震で損傷し、安政2年1月に英龍が没したあと、再構築された。安政5年以降、葦山における大砲鑄造はさかんに行われ、幕府の需要に応じただけでなく、諸藩にも火砲を納入した。

開港後は外国からの情報・人材の摂取が容易になり、技術移入の動きが本格化した。1860年代半ばになると、幕府は江戸滝野川に反射炉を建設し、関口に銃砲製作所を建設するなど葦山の他にも本格的な官営工場の建設に着手した。また、フランスから技師を招いて横須賀製鉄所などの建設もおこなった。葦山反射炉は、文献から学んだ知識を日本在来の鑄物師の技能に接合しようとした、1840～50年代の苦闘を伝える歴史遺産と言える。

このころ日本国内に建設された反射炉のうち、ほぼ完全な姿で残されているものは葦山反射炉だけである。日本における近代産業揺籃期の指標となる遺構であると同時に、世界的にみても、実際に稼働した反射炉としては現存する唯一の遺構であるとされる。

このため、平成23年（2011）より世界文化遺産への登録を目指す「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産に加えられ、八幡製鉄所に至る産業の近代化を伝える歴史遺産として整備・活用の取り組みが進められている。

江川英龍が産業の近代化に果たした役割として、洋式帆船ヘダ号の建造も見逃せない。安政元年（1854）、ロシア使節プチャーチンが和親条約の締結を求めて来航した。乗船のディアナ号は11月におこった安政地震の津波により下田港内で破損し、修理のため回航中に沼津沖合で沈没した。ロシア使節の帰国のために戸田（沼津市）で建造されたのがヘダ号である。伊豆の幕府代官であった江川英龍が建造事業の全般的な計画をたてた。洋式帆船模倣の試みは18世紀半ばから始まっていたが、ロシア乗員の指導のもとで建造された本格的な洋式帆船であった。ヘダ号に倣って建造された「君沢形」「葦山形」の帆船は江戸台場に配備され、建造に参加した船大工は幕府の国産蒸気軍艦「千代田形」の建造にもあ

たった。明治期の造船業の源にあたる。また、「君沢形」「葦山形」帆船は、和船の廻船に洋式帆装を施す流行のもととなり、これらは、20世紀初頭にかけて内国海運で活躍した。沼津市・下田市など伊豆地域の関係自治体との協力は、観光面からも重要である。

明治維新にあたり、葦山代官江川英武<sup>ひでたけ</sup>はいち早く新政府に帰順し、伊豆・武蔵 17 万石を管轄する「葦山県」の初代知事となった。「葦山県」は明治 4 年（1871）の廃藩置県<sup>はいはんちけん</sup>に際して再編され、伊豆と相模西半<sup>あしがらけん</sup>を管する「足柄県」となる。初代県令には英龍の部下だった柏木忠俊<sup>かしわぎただとし</sup>（葦山代官所手代の出身）が任じられた。柏木は明治初期の産業・教育において開明的な施策を行った人物であり、県立葦山高等学校の基礎を据えた人物でもある。

明治 9 年（1876）、「足柄県」は廃止されて伊豆国は静岡県に編入された。明治 22 年（1889）の市制・町村制の施行により、市域には川西村<sup>かわにしむら</sup>（旧伊豆長岡町）・葦山村（旧葦山町）・田中村<sup>たなかむら</sup>（旧大仁町）が成立し、現代につながる地域のまとまりが姿をあらわした。

明治 32 年（1899）、三島・田中村間に豆相鉄道（伊豆箱根鉄道駿豆線）が開通した。終着駅である大仁駅は、そこから馬車で修善寺・天城・中伊豆方面に向かう人々のためのターミナルとなり、同時に、木炭・蚕糸などの物資の集散拠点ともなった。大仁駅周辺には警察署・裁判所・病院などの公共施設が立ち並び、近隣には間宮堂（のち東芝テック大仁事業所）・東洋醸造（のち旭化成ファーマ）など大規模な事業所が立地して、工業の盛んな地域として発展していった。温泉を中心として発展する伊豆長岡町、米作やイチゴ栽培など農業の盛んな葦山町も、特色のある発展を遂げていった。豆相鉄道は、大正 13 年（1924）に修善寺まで延長された。

平成 15 年（2003）、伊豆長岡町・葦山町・大仁町による合併協議会が設置され、平成 17 年（2005）4 月、3 町が合併して「伊豆の国市」が誕生した。

### 【反射炉とその周辺区域】

葦山反射炉は、明治維新後陸軍省の管轄となったが、明治前・中期までは特に保存に関する措置は講じられず、荒れるにまかされていた。しかし、明治後期に至り、江川英武の女婿山田三良<sup>やまださぶろう</sup>（帝国学士院長）を中心として保存運動が展開され、それを受けて、明治 41 年（1908）に陸軍省による保存修理が行われ、保存への道が開けた。大正 11 年（1922）3 月 8 日には国の史跡に指定され、以後数回の大規模な保存修理を経て、現在に至っている。

また、日本における近代的な製鉄技術導入の黎明期を象徴するものとして、世界文化遺産登録を目指す「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成資産となっている。



葦山反射炉



青銅製 29 ドイムモルチール砲

### 【葦山城跡区域】

史跡葦山役所跡は、江戸時代を通じて葦山代官所として機能してきたが、明治元年（1868）から、同4年（1871）まで葦山県庁、同9年（1876）6月まで足柄県葦山支庁、それ以降は静岡県葦山出張所および田方郡役所として地方行政の中心を担った。重要文化財葦山代官江川家関係資料には、幕末の海防・西洋技術に関する資料が含まれている。また、江川家関係写真は、ジョン万次郎撮影の古写真を含む幕末から明治時代前半にかけての貴重な写真461点で、重要文化財に指定されている。

この区域に所在する香山寺の山門は、旧葦山県庁の正門を、明治6年（1873）7月に開業した伊豆国生産会社の正門として移築、それをさらに移転したものとされている。

### 【大仁区域】

大仁区域は、近世以来、水運と陸上交通の結節点として、重要な位置を占めていた。近現代においては、伊豆箱根鉄道駿豆線の敷設とも相まって、行政機関や病院などが建設されるとともに、大規模な工場が立地する工業地帯として発展した。

## 6) 自然のもとで現代に続く地域文化 — 下田街道・狩野川を中心に —

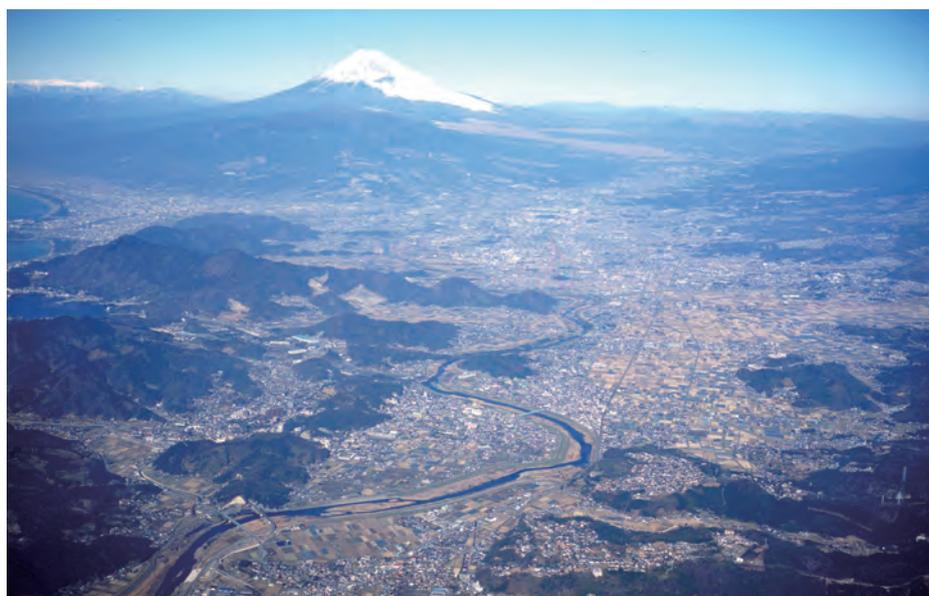
「湯出<sup>ゆいず</sup>る国」という称から「伊豆国」の国名が生じたという説も存在するように、伊豆半島には温泉が多い。「古奈温泉」は熱海・箱根と並んで、中世においてすでに著名な温泉であった。市域を南北に貫く狩野川<sup>かのがわ</sup>と下田街道<sup>しもだかいどう</sup>は、半島を横断して西浦から熱海に通じる道と並んで、人々の交流と産業を支えてきた。しかしながら、自然の恵みは時として災害の原因ともなる。災害を克服する努力は、地域の歴史に深みを加えてきた。

『吾妻鏡』によれば、嘉禎2年(1236)4月、摂家将軍藤原頼経が「伊豆国小名温泉」で湯治する予定であったことがみえ、仁治元年(1240)には幕府医師丹波良基が「北条小那温泉」で死去した記事がある。南北朝期の史料には「古奈湯」と記されるようになり、大永5年(1525)には連歌師柴屋軒<sup>れんがしさいおくけん</sup>宗長<sup>そうちよう</sup>が「古奈といふいて湯」で湯治した記録がある。近世に入ってから湯治客は多く、万治3年(1660)の宿泊客宿帳が伝わる。当時は、8坪の湯船をもつ共同湯であったという。明治元年(1868)年には8軒の宿屋が営業していた。明治24年(1888)の全国温泉番付では東前頭10枚目に位置づけられ、修善寺・熱海に次ぐ知名度であった。明治40年(1907)に長岡温泉が発見されると、古奈温泉と併せて伊豆長岡温泉となり、伊豆を代表する温泉場のひとつに発展した。市内各所から望見される富士の景観と併せて、訪れる人々に自然の恵みを実感させる、本市の大切な財産である。温泉の歴史を明らかにし、湯谷神社<sup>ゆたに</sup>などの寺社・文化財の研究と整備を図ることは重要な課題である。

温泉の恵みをもたらす火山活動は、同時に地震を引き起こす存在でもある。昭和5年(1930)の北伊豆地震は、田方平野に死者255人を数える甚大な被害をもたらした。江間地区に所在する国指定天然記念物地震動の擦痕<sup>じしんどう さつこん ぎょらい</sup>(魚雷表面の擦痕)は、この時の地震動が重量物である魚雷を揺り動かして生じた。災害の記憶を将来の教訓につなげる仲立ちである。



古奈温泉 湯谷神社



富士山と狩野川

狩野川の水もまた市域の歴史を支えてきた自然の恵みである。市域では早くも旧石器時代から狩野川とその支川の流域で暮らしが営まれていた。大仁区域には旧石器時代・縄文時代の遺跡が多く、伊豆最古の縄文土器も発見されている。

豊かな水は稲作の発展を支える土台であった。多くの木製農耕具が発見された葦山城区域の山木遺跡、北伊豆の古墳文化を代表する奈古谷・多田区域の多田大塚古墳群、「若舎人」銘をもつ石櫃が出土した江間区域の北江間横穴群などは、弥生時代から古墳時代にかけて、本市域で盛んな稲作が営まれ、豊かな文化がはぐくまれていたことを窺わせる。

川は物流の動脈でもある。三島に伊豆国府が設けられると、狩野川の水運に加えて伊豆南部に通じる下田街道が整備され、伊豆国の政治的・社会的な一体性が高められた。

平安末期に登場する北条氏は、狩野川と下田街道に接する形で本拠を構えた。守山区域の北条氏関連遺跡からは平安後期の東国では珍しかった中国製陶磁器や東海地方で生産された焼き物が多数発見されている。破損ししやすい大型の陶磁器や焼き物の輸送は水運によったとみられ、水運が経済動脈として活発に展開していたことを示す証拠である。川船と海船との積み替え港に当たる沼津湊は、のちに北条氏の所領（得宗領）となる。

平安時代後期には、東国に伊勢神宮・熊野三山の荘園が多数成立しており、石廊崎沖合を回航する水運によって年貢が搬送された。西浦から北条を経て熱海に至る東西横断路は、石廊崎の難所を避ける短縮路として発達したらしい。源頼朝は平氏討滅のために挙兵する際に、葦山城区域にある「蛭島郷」を伊豆山（熱海）に寄進し、北条政子を伊豆山内に預けて安全を確保した。伊豆山の僧侶たちは頻繁に北条の頼朝のもとを訪れていたのである。『吾妻鏡』では、北条義時は「江間四郎」とも「江間小四郎」とも記され、伊豆西浦に接する江間地区を支配していたらしい。狩野川による南北交通と伊豆半島を横断する東西交通との結びつきが、市域における中世の特徴だった。

小田原北条氏の重臣松田康長は豊臣秀吉の小田原征伐の際に山中城を守った武将である。天正 18 年（1590）の書状のなかで、防御の要として、足柄峠の足柄城と箱根口の山中城に加えて、「方浦口」（片浦口）の葦山城を重要だとした。小田原南部の方浦から熱海を経て多賀に南下し、西に転じて山伏峠から浮橋を経て葦山城に至る街道の存在が指摘されている。

守山区域には「四日市」という三斎市が立てられ、年貢を収納するとともに農民たちに種籾を融資する大名の「御蔵」が設けられた。葦山城は伊豆西浦における北条水軍の拠点、長浜城（沼津市）を統括していた。葦山城の「蛭嶋口」には南伊豆の代官であった清水氏の屋敷もあり、伊豆全域の政治支配の上でも中枢にあたる位置を占めていた。

伊豆半島の横断路は、伊豆西浦の活鯛を江戸に出荷するための「網代道」として近世にも盛んに用いられた。原木・塚本・江間の馬士が、西伊豆三津から東伊豆網代への運送に携わった。とはいえ、東海道箱根道が整備されたことにより、近世の本市域は伊豆半島を横断する主な街道からは離れた。年貢米や木材を出荷する狩野川の舟運や筏流しは盛んであり、大型の川船が就航し、荷役場所としての「河岸（かし）」も多く設けられた。天野・江間地区に水を引く江間用水の建設など、川の恵みを広げる工夫も凝らされた。下田街道は、幕末になって下田港が重要になったことから整備が加えられた。

治水は社会と自然との相互関係のなかで展開した。たとえば、明暦 3 年（1657）の大火で江戸市中が壊滅すると、再建工事のために伊豆の木材が大量に切り出された。このことから伊豆の山林が禿げ山状態となり、寛文 11 年（1671）の暴風雨で狩野川に鉄砲水が生じ、大きな被害を生じたということもあった。狩野川のおかげで干ばつの生じることは比較的少なかったが、洪水被害の記録は非常に多く残されている。近世を通じて繰り返し堤防や棒出（水制施設）の修築、川浚いが行われた。近代に入ってから、昭和 33 年（1958）の狩野川台風による洪水被害を教訓として、昭和 40 年（1965）に狩野川放

水路が設けられた。

狩野川の川辺は、富士の眺め、春の花見など、人々に憩いと安らぎを与えてくれる場である。そのいっぽうで、神島地区に伝わる「かわかんじょう」の行事は水害の記憶にちなみ、狩野川とともに生きる民衆の切実な思いから起こったものである。自然の恵みを享受するとともに、災害の記憶を保ち、先人たちの苦闘から未来へつなげる知恵を汲み取ってゆくということは、今後も大切な営みになるであろう。

#### 【守山区域】

守山区域の東側には中世の下田街道と現在の下田街道（国道 136 号線）が併行して通っている。先述のように、中世下田街道と狩野川に挟まれた、四日町・寺家地区には、史跡北条氏邸跡をはじめとする中世の遺跡が多く存在し、河川交通と街道の結節点であるこの地が、鎌倉時代の中心地であったことがわかる。戦国時代には、下田街道に「四日市」が立てられ、流通の中心として栄えたことが諸記録に記されている。八坂神社は、<sup>やさか</sup>市神として勧請されたといわれる。また、街道沿いには、下田街道道標・<sup>どうひょう</sup>市神さん・<sup>どうそじん</sup>道祖神など、街道に関わる文化財が残る。

#### 【韮山城跡区域】

富士山を美しく望めるビュースポットは市内各地にあるが、重要文化財江川家住宅（江川邸）裏門もそのひとつである。伊豆に巡見を訪れた老中松平定信が同行の谷文晁に、この裏門から望む富士山を描かせたというエピソードも伝えられている。

#### 【大仁区域】

<sup>かみしま</sup>神島地区に伝わる「かわかんじょう」は、狩野川と深く関わる伝統行事である。毎年 8 月 1 日の夕刻に行われ、暴れ川とされた狩野川の水霊を鎮め、水害から村を守るためと水難者を供養するための盆の行事として続けられている。

田京地区の広瀬神社は、旧下田街道と、亀石峠を経て伊東市に向かう街道との交差点に鎮座する。三嶋大社の后神である三島溝織姫命を祭神とし、古来より同社との関わりが深いといわれている。

#### 【伊豆長岡区域】

江間用水は明暦元年（1655）につくられた天野地区から江間地区に至る延長約 5 Km の用水路である。取水のため、天野地区の狩野川に設けられた堰を江間堰と<sup>えませぎ</sup>呼ぶ。

中世の「小名温泉」の正確な位置は不明であるが、古奈温泉の中心に湯谷神社が鎮座している。中世以来の古奈温泉と、明治 40 年（1965）湧出の長岡温泉を併せた伊豆長岡温泉として、戦前・戦後を通じて多くの観光客を迎える観光地である。

#### 【江間区域】

南江間にある国指定天然記念物地震動の擦痕は、昭和 5 年（1930）に発生し、当市域にも甚大な被害を与えた北伊豆地震の揺れが、魚雷の表面に傷跡として記録されたものである。



広瀬神社



地震動の擦痕

## 資料2 伊豆の国市の歴史変遷（年表）

時代	日本の主な出来事	伊豆の国市の主な出来事	
原始	旧石器時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 50000 年前～ 13000 年前 氷期と間氷期がくりかえされるなかで、日本列島に人類が移住してくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 狩野川の段丘上（標高 30 ～ 50 m）や丘陵地帯（標高 200 ～ 300 m）などで、八丁平遺跡・笹子遺跡・二之沢遺跡・湯ヶ洞山遺跡等の遺跡が発見される。</li> </ul>
	縄文時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 13000 年前～ 2300 年前 氷河期が終わり、気候が暖かくなり、土器が作られるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 仲道 A 遺跡から県内で初めて草創期の土器が発見される。</li> <li>・ 早・前期の遺跡は丘陵地帯から多く発見（大平 A・B・C 遺跡・上ノ田遺跡・茅野 B 遺跡等）されており、定住化の兆しが認められる。</li> <li>・ 中期になると定住化が進み、狩野川東岸の段丘上や丘陵地帯に仲道 A 遺跡・向原遺跡・上西ノ窪 A 遺跡等、多くの遺跡が発見されている。</li> <li>・ 後期から晩期の遺跡は段遺跡・神崎遺跡等があるが、数は少なく、人々の活動は停滞していた。</li> </ul>
	弥生時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 約 2300 年前 九州北部で稲作農耕が始まる。</li> <li>・ 239 年 邪馬台国の卑弥呼、魏国に朝貢し「親魏倭王」の称号を贈られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中期後半（約 1900 年前） 稲作技術が伊豆中央部にも伝わり、田方平野でも蛭ヶ島遺跡周辺で米づくりが始まる。</li> <li>・ 後期（約 1800 年前） 田方平野周辺の平地や低地に集落ができ米づくりが盛んとなる（山木遺跡・神崎遺跡・宮下遺跡・壱之上遺跡・湯ヶ洞山遺跡等）。</li> <li>・ 段遺跡から近畿式銅鐸の飾り耳片が出土。</li> </ul>
古代	古墳時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 248 年 卑弥呼が死に、直径百余歩の大きな塚が造られる。</li> <li>・ 593 年 聖徳太子摂政となる。</li> <li>・ 6 世紀～ 7 世紀初 この頃伊豆国造が大和王権から任命される。</li> <li>・ 大化元年（645） 大化の改新</li> <li>・ 天武 9 年（680） 駿河国から 2 郡を分け、伊豆国を分置する。</li> <li>・ 大宝元年（701） 大宝令公布。この頃伊豆国は田方、那賀、賀茂の 3 郡となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5 世紀後半 多田大塚古墳群が造られる。4 号墳からは県内最古の馬具轡や、短甲等・鏡が出土。6 号墳からは馬や武人の埴輪が出土する。</li> <li>・ 6 世紀～ 7 世紀初 駒形古墳（前方後円墳）が造られる。人物埴輪等が出土する。</li> <li>・ 7 世紀後半 この地域にも仏教が伝わり白鳳寺院（宗光寺）が建立される。</li> <li>・ 7 世紀中～ 8 世紀前 北江間地区に多数の横穴墓（大北横穴群・大師山横穴群）が造られる。</li> <li>・ 7 世紀後～ 9 世紀前 花坂島橋古窯群址等で伊豆国分寺や周辺寺院で使う瓦や土器が焼かれる。一部の土器は当時の都である平城京・長岡京などに運ばれた。</li> <li>・ 7 世紀末～ 8 世紀前 仏教伝播とともに火葬が始まる。大北横穴群から「若舎人」と刻まれた石櫃をはじめ、火葬骨を入れた石櫃が数多く発見される。</li> </ul>
	奈良時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 和銅 3 年（710） 平城京（奈良市）に遷都</li> <li>・ 神亀元年（724） 伊豆、安房等 6 ヶ国が遠島の地となる。</li> <li>・ 天平勝宝 2 年（750） 大仏建立の詔（奈良大仏作られる）。</li> <li>・ 天応元年（781） 富士山が噴火する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 天平勝宝 7 年（754） 依馬郷にいた「委文連大川」が調として「緋狭繩」を京進する。</li> </ul>

時代	日本の主な出来事	伊豆の国市の主な出来事
古代 平安時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦13年(794) 平安京(京都市)に遷都</li> <li>延暦19年～21年(800～802) 富士山が噴火する(延暦大噴火)。</li> <li>承和7年(840) 駿河国駿河郡の氷蔵駅家を伊豆国田方郡へ還す。</li> <li>貞観6年～8年(864～866) 富士山が噴火する(貞観大噴火)。</li> <li>貞観8年(866) 大納言の伴善男が伊豆国に配流される。</li> <li>承平5年(935) 平将門の乱始まる。</li> <li>天慶2年(939) 平将門、弟将武を伊豆国の守に私任。</li> <li>治承4年(1180) 8月源頼朝、鎌倉に入る。</li> <li>同10月 頼朝、富士川の戦いで平氏を破る。</li> <li>同12月 頼朝、鎌倉に居を移す。</li> <li>文治元年(1185) 平家、壇ノ浦で滅亡する。</li> <li>文治5年(1189) 奥州藤原氏滅亡する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>延長8年(930) 『倭名類聚抄』編纂。伊豆の国市の郷名として、茨木(原木)郷・八牧(山木)郷・依馬(江間)郷・天野(天野)郷の記述がある。</li> <li>永暦元年(1160) 平治の乱、源頼朝、伊豆に配流され、蛭ヶ島に居を構える。</li> <li>12世紀後半 北条時政が北条に館を構える(史跡北条氏邸跡)。</li> <li>承安3年(1173) 高尾上人文覚、院中の悪言により伊豆に配流され、奈古谷に住む。</li> <li>治承3年(1179) 平兼隆、官を解かれて伊豆へ配流され、目代となって山木氏を称する。</li> <li>治承4年(1180) 4月 平家追討を命じる以仁王の令旨が頼朝に届く。</li> <li>同8月 頼朝挙兵。伊豆目代山木兼隆の館を襲う。</li> <li>文治2年(1186) 北条時政、運慶に依頼し願成就院の仏像を造る。</li> <li>文治5年(1189) 北条時政、奥州藤原氏征討を祈願して、願成就院を建立する。</li> </ul>
中世 鎌倉時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>建久3年(1192) 頼朝、征夷大將軍となり、鎌倉に幕府を開く。</li> <li>正治元年(1199) 源頼朝没する。</li> <li>建仁3年(1203) 時政・義時親子、將軍頼家を修善寺に幽閉し(翌年謀殺)、將軍の弟、実朝を擁立。時政、執権となる。</li> <li>承久3年(1221) 承久の変。後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対し倒幕の兵を挙げるが、北条政子・義時ら幕府軍に鎮圧され、上皇方の公家・武家領地が召し上げられ新補地頭が置かれる。</li> <li>嘉禄元年(1225) 北条政子没する。</li> <li>文永11年(1274) 文永の役(元寇)</li> <li>弘安4年(1281) 弘安の役(元寇)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>元久2年(1205) 北条義時・政子、父時政を伊豆国北条(守山付近)に引退させる。</li> <li>建保3年(1215) 北条時政、伊豆国北条で没する。</li> <li>貞応元年(1222) 願成就院が定額寺(官寺)となる。</li> <li>嘉禄元年(1225) 古奈温泉に將軍藤原頼経が湯治に来る計画が、鎌倉鶴岡八幡宮の怪異により中止となる。</li> <li>嘉禎2年(1236) 北条泰時、願成就院北に塔を建立する。</li> <li>寛元4年(1246) 北条光時(名越流)が北条時頼と対立して「伊豆国江間宅」に幽閉される。</li> </ul>

時代	日本の主な出来事	伊豆の国市の主な出来事
中世	鎌倉時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>元弘3年(1333) 鎌倉幕府滅亡。後醍醐天皇による建武の新政始まる。</li> <li>元弘3年(1333) 北条高時母覚海円成尼が「円成寺」を開く(史跡円成寺跡)。</li> <li>同年 足利尊氏、鎌倉幕府倒幕の勲功として上杉憲房に奈古谷郷地頭職を給付する。</li> </ul>
	室町時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>暦応元年(1338) 足利尊氏、室町幕府を開く。</li> <li>正平7年(1352) 畠山国清、伊豆国守護となる。</li> <li>正平8年(1353) 畠山国清、鎌倉府の関東執事に任命される。</li> <li>応永4年(1397) 足利義満、金閣寺を建てる。</li> <li>康永元年(1342) 上杉憲顕、菩提寺となる国清寺を建立する。</li> <li>貞和元年(1345) 円成尼没。その後、山内上杉氏の女性たちが尼として円成寺に入る。</li> <li>康暦2年(1380) 国清寺、禅宗寺院の五山十刹の準十刹となる。</li> <li>応永23年(1416) 犬懸上杉禅秀、鎌倉公方足利持氏に反乱。禅秀方、国清寺を攻め、奈古谷合戦となる。</li> <li>永享10年(1438) 鎌倉公方足利持氏と関東管領上杉憲実衝突(永享の乱)。上杉憲実、かつての主人足利持氏を弔うため国清寺に籠居する。</li> <li>長祿2年(1458) 足利政知、新たな関東公方として下向。葦山に御所を構える(堀越公方)。</li> <li>寛正6年(1465) 円成寺より、將軍義政に御器と海苔が献上される。</li> <li>延徳3年(1491) 堀越公方、足利政知没する。</li> </ul>
	戦国時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>明応4年(1495) 早雲、小田原城を攻略し、関東支配の中心とする。</li> <li>天文12年(1543) 種子島に鉄砲が伝来する。</li> <li>天文23年(1554) 甲相駿(武田・北条・今川)三国同盟締結。</li> <li>永祿3年(1561) 桶狭間で今川義元戦死する。今川・武田・北条の3国のバランスが崩れる。</li> <li>永祿11年(1568) 三国同盟破綻。信玄は今川領駿河へ、家康は今川領遠江に侵攻する。</li> <li>永祿12年(1569) 今川氏真、掛川城において家康に降伏する。今川氏滅亡する。</li> <li>天正元年(1573) 足利義昭、信長に降伏し、室町幕府滅亡する。</li> <li>天正10年(1582) 3月 織田・徳川・北条に攻められ、武田氏滅亡する。</li> <li>同6月 本能寺の変 織田信長没する。</li> <li>明応2年(1493) 伊勢宗瑞(北条早雲)、伊豆に侵攻、堀越御所を攻める(堀越御所滅亡)。その後、本拠となる葦山城を築く。</li> <li>永正3年(1506) 伊勢宗瑞、葦山城で分国法「伊勢宗瑞十七箇条」を制定したと言われる。</li> <li>永正16年(1519) 伊勢宗瑞、葦山城で没する。修善寺で葬儀、箱根湯元の早雲寺に葬られる。</li> <li>永祿12年(1569) 武田信玄、駿河東部・伊豆に侵攻、葦山城で北条氏規らと合戦に及ぶ。</li> <li>元龜元年(1570) 武田信玄、葦山城を攻める。</li> <li>天正8年(1580) 武田氏との駿河湾海戦。北条氏政が葦山城を堅く守るよう命ずる。</li> <li>天正13年(1585) 北条氏、葦山城の大普請を行う。以後、天正18年まで普請が続けられる。</li> </ul>

時代	日本の主な出来事	伊豆の国市の主な出来事
中世 戦国時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天正 17 年 (1589) 豊臣秀吉、北条氏政・氏直親子に小田原討伐を宣戦布告する。</li> <li>・天正 18 年 (1590) 7 月 小田原城開城。戦国大名としての北条氏は滅亡する。</li> <li>・同 8 月 徳川家康、秀吉の命により関東六国へ配置換えとなる。</li> <li>・慶長 5 年 (1600) 関ヶ原の戦い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天正 18 年 (1590) 3 月 豊臣方の韮山城攻め、始まる。</li> <li>・同 6 月 24 日 北条氏規、家康のすすめに応じ韮山城を開城する。</li> <li>・同 8 月 内藤信成韮山城主となる (韮山藩 1 万石成立)。</li> <li>・慶長元年 (1596) 江川英長、韮山代官となる。</li> <li>・慶長 6 年 (1601) 内藤信成が駿府へ転封する (韮山城廃城・韮山藩なくなる)。</li> </ul>
近世 江戸時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・慶長 8 年 (1603) 徳川家康、征夷大將軍となり、江戸幕府を開く。</li> <li>・寛永 16 年 (1639) 鎖国令</li> <li>・寛永 19 年 (1642) 伊奈忠公が三島代官に就任し、三島代官と韮山代官による伊豆支配が確立した。</li> <li>・元禄 11 年 (1698) 「元禄地方直し」政策によって、伊豆国に旗本領が増える。</li> <li>・宝永 4 年 (1707) 富士山の南東側が噴火し、3 つの宝永火口ができる。</li> <li>・寛保 2 年 (1742) 下田街道に人馬の継立場が置かれた記事が残る。</li> <li>・嘉永 6 年 (1853) ペリー来航する。品川台場着工。</li> <li>・安政元年 (1854) 日米和親条約締結、下田と箱館 (函館) 開港。</li> <li>・同 ロシア使節ブチャーチンの乗艦するディアナ号が、下田停泊中に安政東海大地震の津波にあい損傷を受け、後に沈没。江川英龍、戸田において船員帰還用の洋式帆船 (ヘダ号) 建造の指揮をとる。</li> <li>・慶応 3 年 (1867) 大政奉還・王政復古、江戸幕府滅ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元和 6 年 (1620) 北条地区の水不足解消のため、欠指堤を築き、賀茂川から水を引き入れ溜池とし、北条・原木に用水を供給。</li> <li>・明暦元年 (1655) 天野前の狩野川に堰 (江間堰) を築き、用水を開削し江間に水を引く。</li> <li>・天保 6 年 (1835) 江川英龍 (坦庵)、韮山代官となる。</li> <li>・天保 13 年 (1842) 江川英龍、韮山塾を開き、佐久間象山をはじめ全国からの入門者に西洋砲術を伝授する。</li> <li>・嘉永 6 年 (1853) 江川英龍、反射炉築造の命令を受ける。</li> <li>・安政元年 (1854) 田方郡中村にて韮山反射炉起工。</li> <li>・安政 2 年 (1855) 江川英龍没する。</li> <li>・安政 5 年 (1858) 韮山反射炉竣工する。</li> </ul>
近代 明治時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治 21 年 (1888) 市制・町村制施行</li> <li>・明治 22 年 (1889) 大日本帝国憲法発布</li> <li>・明治 31 年 (1898) 豆相鉄道、三島ー南条間に軽便鉄道開通。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治元年 (1868) 韮山県成立、韮山に韮山県庁を設置、江川英武県知事となる。</li> <li>・明治 4 年 (1871) 廃藩置県・韮山県廃止、足柄県成立。旧韮山県庁に支所が置かれる。</li> <li>・明治 9 年 (1876) 足柄県廃止・静岡県成立。旧足柄県韮山支所に支庁が置かれる。</li> <li>・明治 12 年 (1879) 郡制施行により韮山支庁廃止される。</li> <li>・明治 24 年 (1888) 古奈温泉、全国温泉番付東前頭 10 枚目に位置し、伊豆では修善寺、熱海につぐ知名度を誇る。</li> </ul>

時代		日本の主な出来事	伊豆の国市の主な出来事
近代	明治	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治 32 年 (1899) 豆相鉄道、三島－大仁間に鉄道敷設</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治 40 年 (1907) 長岡温泉が内田賢之助、山下甚平らによって発見、開発される。</li> </ul>
	大正時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大正 5 年 (1916) 下田鉄道、下田－大仁間に米国製乗合バス運行</li> <li>・大正 13 年 (1924) 伊豆箱根鉄道駿豆線、大仁－修善寺間開通</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大正 8 年 (1919) 大仁の間宮勝三郎が加減算機等を製造する間宮堂を設立（現東芝テック）。</li> <li>・大正 9 年 (1920) 大仁の脇田信吾が東洋醸造を設立（その後旭化成と合併）。</li> <li>・大正 11 年 (1922) 葦山反射炉、国指定史跡となる。</li> </ul>
	昭和時代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和 5 年 (1930) 11 月 北伊豆地震発生する。</li> <li>・昭和 20 年 (1945) 太平洋戦争終戦</li> <li>・昭和 21 年 (1946) 日本国憲法公布</li> <li>・昭和 39 年 (1964) 東京オリンピック開催される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和 5 年 (1930) 葦山反射炉、文部省の所管となる。</li> <li>・昭和 9 年 (1934) 伊豆長岡町が誕生する。</li> <li>・昭和 15 年 (1940) 大仁町が誕生する。</li> <li>・昭和 23 年 (1948) 葦山高校バレーボール部、インターハイで連続優勝する（昭和 26 年度まで）。</li> <li>・昭和 25 年 (1950) 葦山高校野球部、全国選抜高校野球大会で優勝する。</li> <li>・昭和 32 年 (1957) 葦山反射炉保存修理、耐震用鉄骨トラスが設置される。</li> <li>・昭和 33 年 (1958) 狩野川台風。狩野川が氾濫し大被害を受ける。</li> <li>・昭和 37 年 (1962) 葦山町が誕生する。</li> <li>・昭和 40 年 (1965) 狩野川放水路が完成する。</li> <li>・昭和 48 年 (1973) 願成就院跡、国指定史跡となる。</li> <li>・昭和 51 年 (1976) 北江間横穴群、国指定史跡となる。</li> <li>・昭和 59 年 (1984) 伝堀越御所跡、国指定史跡となる。</li> <li>・昭和 60 年 (1985) 葦山反射炉修理事業起工式</li> </ul>
現代		<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 8 年 (1996) 北条氏邸跡、国指定史跡となる。</li> <li>・平成 16 年 (2004) 葦山役所跡、国指定史跡となる。</li> <li>・平成 17 年 (2005) 4 月 伊豆長岡町・葦山町・大仁町が合併し、伊豆の国市が誕生する。</li> <li>・平成 25 年 (2013) 6 月 願成就院の運慶作諸仏、国宝となる。</li> </ul>	
	平成時代		